法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<卒業論文小特集>倉橋由美子論 : 反世界への降下

小鹿, 糸

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
29
(開始ページ / Start Page)
62
(終了ページ / End Page)
74
(発行年 / Year)
1983-11-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019377

倉橋由美子論

——反世界への降下——

小鹿　糸

違和が構築する世界

倉橋の文学の軌跡をたどるとき、『パルタイ』から『城の中の城』に至る作品群は、それぞれの形相を呈しながらそこに内包されたひとつの質料がある。作品の根底に内在するもの、それは世界に対しての違和である。その存在論的な感覚は絶えまなく現実を告発しつづける。その文学空間においては世界と人間のあいだのあらゆる意味が否定される。イデオロギー、ヒューマニズム、モラル、宗教、愛、それらすべてが剝離され、世界は無化される。そこにはとぎすまされた、世界との断絶感がある。世界に対しての否(ノン)。現実と和解せず、和解し得ず、ひとつの想像力が世界を越えて志向する空間——それが〈反世界〉である。

第一章　『パルタイ』論

その文学空間と接触をもつなら、わたしたちはすぐさまそこに否定性をみるだろう。『パルタイ』が発表された文壇的状況においてその質はすでに決定されてしまったかのようである。しかしわたしたちがいま〈反世界〉に臨むとして、手がかりはそれと方向を別にする。「違和」の構築する世界へとわたしたち自身が足を踏み入れるならば、それが〈反世界〉を構築する者の動機に近づくことになる。『パルタイ』の「歪みの多いイマージュ」(1)を通りぬけながら〈反世界〉へ降りていきたい。

I

ある日あなたは、もう決心はついたかとたずねた。わたしはあなたがそれまでにも何回となくこの話を切りだそうとしていたのを知っていた。それにいつになくあなたは率直だった。そこでわたしも簡潔な態度をしめすべきだとおもい、それはもうできている、と答えた。

――『パルタイ』の冒頭の文章である。わたしたちはこれを、乾いていて幾分シニシズムを含んだ文体、と呼ぶことができる。それは世界に対してどこか無関心な――世界のある部分に意味を見いださない――ひとの、素気ない語りに似ている。それは一定した律動(リズム)をつくりだし、その律動(リズム)は「わたし」の裡に内在するであろう恒常的な疲れや倦怠感をわたしたちに伝える。この文体は窪田啓作訳のカミュの『異邦人』の様式(スタイル)を顕著にとっているもので、倉橋自身の言いまわしによれば、『パルタイ』はカフカ、カミュ、サルトルの三位一体である(2)という。

「パルタイ」とはドイツ語の Partei 即ち「共産党」のことである。ここでは、しかしそれは固有名詞ではなく、抽象的な名称の役割しかあたえられていない。この小説は、党活動に参加していながら非党員である「わたし」の、党やそこに属する人間に対する批判の形をとりながら展開される。しかし党内部の具体的な問題に視点が置かれるのではなく、小説全体が抽象的であり観念的であり、さらには感覚的である。それはたとえば党というものを「どこかに実在し、奇妙に複雑なメカニズムで動いており、たえずのびちぢみしてはわたしのような個人をのみこみまた吐きだしているにちがいない」ものとして提示する。ここに提示された党は、わたしたちにあのカフカの城を想起させはしないだろうか。「経歴書」が次第に上級の機関へとおしあげられていく、その審査のプロセスも城の機構を連想させる。結末のない、おそらくはどこまでいっても未完でしかあり得ないあの長編小説は、わたしたちを疲れさせるに充分であるが、そこに出てくる〈城〉の存在とは、抽象的でいわば空中楼閣のようなものである。そのためにわたしたちはその実在性をついに感じとることができない。パルタイはこの城を縮小した相似的な存在で、それはそこに属する人間にとっても幻の抽象の城である。それはほとんど神話的といっていい。そこに属する人間、ひとつの思想と「革命の必然性」とを「信じる」ことによって結ばれた「同志」や「なかま」といった関係もやはり抽象的であり曖昧である。「不透明なものに対してオントをかんじないではいられないわたし」は、そういった曖昧なものを認めることができない。

わたしたちが「信じる」というとき、それは一体どういうことか。「信じる」とは自分が信じているということを意識することであり、自分が信じているということを意識するということはもはや信じていないということである。ところが「信じる」ことによって、「あなた」の、「党」や「なかま」との関係は成り立っている。そういった素朴で無反省な信念や自信が「わたし」の嘲笑を招く。「《信じる》という赤あざのようなもの」にその顔や目をおおわれているために、かれらはそれが滑稽であることに気づかずにいる。「かれらは敵を知らず、ただ敵というイデーを憎み、人間というイデーをあいそうとしているにすぎないのではないか(3)」。「わたし」は「理解しあおうという形式に従順」なかれらをしかみない。それは「オントの紐でつながれた犬の集団」であり、その関係は一種の馴れ合いにすぎない。かれらにとって「革命」とはなにか。

《革命》はわたしの外にあるなにかではない。もしも《革命》

がそういうものだとすれば、外にあるものの≪必然性≫がどうやってわたしの自由、わたしの選択にかかわってくるというのか。≪革命≫は必然的だからパルタイにはいるのではなく、わたしは≪革命≫を選びたいからはいるのだ。そしてわたしは自分自身の自由を拘束することによって、いっそう自由になることを選ぶのだ。わたしの参加が≪革命≫を必然的なものにする。

つまり「わたし」の在りかたの外にある意味が「わたし」にとって何を意味するだろうか（意味しない）ということである。「革命」が現実とまじわる地点をもたないのは、かれらが「革命」の観念に陶酔しているにすぎないからである。「外見はひどくラディカルであるにもかかわらず、どこか曖昧で甘やかされた≪疑似政治運動(4)≫」「それは≪学生≫時代を愉しくすごすためのスポーツに似ている」。――そうした「観念的な左翼を嗤う(5)」倉橋の姿勢が作品全体をアイロニーの皮膜でつつみ、その文体ともあいまってよりシニカルなものにする。作者は巧みにそのアイロニーの裏側に身を隠していて、「わたし」の批判は一応成功しているといっていい。

パルタイが「信じる」ということと、さまざまの「掟」や「秘儀」の総体からなっていること、そこには「神のもとに友愛をとくある種の団体」とさほどのちがいは見出せない。マルクス主義の体系はそのとき「人間の精神に対して宗教が果すのと同じ役割を果す(6)」。それを信仰し、革命の観念に憑かれた人間とは倉橋が命名するところに従えば「マルクス教徒殉教者(7)」の名で呼ぶことができる。それらマルクス教徒殉教者たちのなかにあって、なにも信じない「わたし」は異教徒ですらなく、さしあたり異邦人とでもいえばロマネスクだろうか。ただしそれはムルソーのような情熱をもってはいないけれども。

「わたし」はなにも信じない。「革命の必然性」をも、自分の活動の客観的意義をも。党や革命に対しての「信仰」なしに、また触発されるべくなにものももたず、ただ単にしかし明晰な意識のもとでパルタイを選んだ。それが「わたし」にとって問題なのであり、「わたし」にはパルタイにはいら＜なければならない＞理由はない。それを選ぶ意志があるだけだ。

わたしはパルタイを選び、パルタイによってわたしの自由を縛ろうと決意した。

信じられることは組織がわたしの自由を拘束することによってわたしをかつてないほど自由にしているということだ。

このようないわば二律背反的な論理をわたしたちはどう解したらよいだろうか。それはおそらくはこうである。――つまり世界がある。それはただそこに＜ある＞だけでまずこれがその性質である。それは不条理でもなく、またいかなる意味をももたない。なぜなら意味とは主観性からしかやってこないものだから。「存在するとはたんに〝そこに在る〟Dasein ことだけでなく、同時に〝そこに属する〟Ihm-gehören を意味する」とはカフカのアフォリズム(8)であるが、わたしたちが属する世界とはすでに名づけられたものであ

り、なんらかの意味づけをされたものである。わたしたちは了解されたもののなかにある。「わたし」にとって世界は居心地のよくない容器である。世界所属の感触、それはむねをむかつかせる。この世界と和解できない部分は「わたし」のなかで閉じられた空間だ。「わたし」の内世界、それを自我と呼んでもいい。自我は世界を眼前にして明晰であろうとする。それこそが生の明証性だから。その明証性を極度に追求する「わたし」は行為において一切の意味の付与、理由づけを拒否する。パルタイ入党において、また「労働者」とのその関係、パルタイや「あなた」との訣別において堅持されるのは常に意識の明晰さである。なにも信じない「わたし」にとって意識の明晰さは知的価値である。信じてもいない党に身をおくことによってより自由になるということは、内部に閉じられた空間をもつ、自身の明晰な意識のもとにおいてである。ここで「拘束」とは「わたし」がパルタイにはいるということへ向かっての具体的な企てにおいて、「わたし」の自己性を生きるときのありかたである。それは自己拘束であって、つまり組織による拘束ではないということである。そしてさらに組織による拘束を選ぶということが自己拘束になる。「わたし」は抽象的に自己をとらえるのではなく、具体的なその投企において生きるのである。「わたし」は党のなかに身をおきながら党そのものを信じてはいないし、自分の活動の客観的意義をも信じてはいないから、組織の拘束、党の「秘儀」や「掟」といったものから本来的に自由だ。そしてそれと同時に「お祭りじみた日常生活」「単純で具体的な生活」、その日常性からも自由でありたいとする。「日常性」とはハイデッガーにならっていえば「無差別的なさしあたり大抵ということ(9)」である。わたしたちはありきたりの日常性の様相において世界と関っている。そこで「わたし」の「わたしの存在」への嫌悪、存在への憎悪がはじまる。明晰な意識を主張するこの「わたし」には、おそらく自身の身体すら疎ましく、できるなら「わたし」は意識そのものとしてだけありたいのだ。

わたしは過去によって自分を拘束し、裏づけすることにオントをかんじる。わたしは過去をぬけだして未来へ身を投げたいとおもう。

ここにあるのもまた、明晰への志向性である。「わたし」は自分の過去や自分が失ったものから自由でありたいとする。過去というとき、時間性の本質的な構造（時間が普遍的なものか個別的なものか、円環であるのか直線であるのか、あるいは同質的な持続なのか異質的な転化なのかといったその本質をみきわめるという困難な問題）にわたしたちが立ち入らないとして、ふつう過去は＜すでにない＞もの、現在は＜いまある＞もの、未来は＜まだない＞ものであると一応考えられる。厳密にいうならば、この＜すでにない＞と＜まだない＞の間には決定的な断絶が要求されるはずである。けれどもわたしたちは＜すでにない＞ものが＜いまある＞ものの原因であり、＜まだない＞ものが＜いまある＞ものの結果だとし、またそのことを懐疑しようとはしない。『パルタイ』の「わたし」はそうした＜すでにない＞ものの意識への侵入を禁じ、因果関係や理由づけ

の一切を拒否する。そうすることによって、最大限の自由と明晰な意識の状態で「パルタイを選ぶこと」を企てる。意識をひとつの企てのなかに拘束すること。これが「未来へ身を投げかけること」即ち「投企」である。

しかし「経歴書」がやがて「パルタイ員証」になってくるとき、

（略）わたしはますます深まっていく≪オント≫の感情にじっとしていても汗ばみ、世界がぐらぐらするような気もちだった。そのたびにわたしの頭は粘液性の抽象的な壁にぶつかり、こすりつけられた。壁のようにみえるのはじつはわたしなのだということをわたしは知っていた。わたしは自分の選んだ過去という壁のなかに閉じこめられ、熱気のなかで窒息しそうだった。

ここで描かれるのは「わたし」の眩暈である。「わたし」は未来へ向かって投企しようとするが、背後から過去の吸引によってひきとどめられるのを感覚する。「わたし」の過去性は「経歴書」のなかにあるのだから。「粘液性」とはそれが「わたし」の意識にまとわりつき、ねばりつく性質のものであることを示している。無論それは現実には存在しないものであって、「わたし」の直観的な発見にほかならない。眩暈が感覚されるのはこのときである。「わたし」は未来へ身を投げるどころか、むしろそれによって過去のなかへ逃れ出るのを感じる。しかし「わたし」自身がその粘液性のものの根拠なのであり、つまり「わたし」は「わたしの過去性」にほかならないのである。「わたし」はそのことに充分気づいているから、「この茫然とした状態」を喜劇だと自嘲する。「経歴書」のなかに収められた「わたし」の過去。それを書いたことがすでに＜オント＞であるが、これ以上＜オント＞を重ねるべきではない。「それは速やかにとりもどされなければならない」。――こうして「あなた」との論争を経た「経歴書」で入党手続を終え、党員証を手にしたとき、「わたし」の脱党がはじまる。

II

わたしの根源的堕落は他人の存在することであり、葛藤が他人に対する存在の根源的意味である。

――サルトル――

ところでわたしたちは『パルタイ』が革命の観念性に対する批判とはレヴェルを異にするところにもっているもの、即ち作家が意図したとしないとにかかわらず、作品それ自体が孕んでいるものに留意する必要があるだろう。「革命の神話」批判に先行してあるもの、それは「わたし」の意識にとっての「他者」の問題である。わたしたちの誰もが知っていることだが、わたしがこの世界にあるということは、他人たちとともにあるということである。わたしたちは共同存在であり、他者との関係のなかに拘束されている。世界からも他者からも孤立した主観としての自我は時代おくれの、色褪せたナルシズムにすぎない。そういうわけでわたしたちは、それに同意するというよりはなかばあきらめて、他者の視線にじっと耐えている。けれどもこの、「他人たち」がすでに世界のなかに存在していると

いうこと、それはしばしばわたしたちをうんざりさせる。「なぜ他人たちが存在するのか」。無論これは形而上学の問いである。しかしそれに対しては「それは存在する」という答えしかかえってこないことをわたしたちは充分知っている。『パルタイ』ではこの形而上学の問いが深く追求されはしない。しかし主人公の「他者」に対する攻撃性はすぐに読者の注意をひくだろう。「わたしは他人のまなざしでながめられ、他人からことばを着せかけられることにはよく慣れていた」という他者への意識は、他者という対象への根源的なそれである。わたしたちが他者と係るのは日常的な現実のなかにおいてであるが、他者の存在は「わたし」の現実世界に対する憎悪の媒体である。

一般に集団生活は≪オント≫をそのものとしてかんじなくなることであり、人間のもっている異臭に慣れることだとわたしはおもう。

〈オント〉はここで他者の存在に対しての違和である。厳密にいうなら、他者のそこに「あること」が問題なのである。「異臭」という表現は他者の、あるいは存在それ自体のもつなにか動物的な臭気を発散させている。「わたし」にとって現実は他者を介して「異臭をもった粘液質の世界」になる。その粘液質の世界では、

要するに≪なかま意識≫とかれらが好んで呼ぶところの、わたしには恥しいような感情が分泌されつづけていた。

他者というもののこうしたとらえかたは極めて感覚的あるいは体質的である。そしてこれは『貝のなか』で、この作家の特性、その質的な部分を明示することになる。『パルタイ』のとりあえずの模倣という意図で書かれた『貝のなか』は、しかし『パルタイ』のその乾いた拡がりに対し、湿気を含んだ全体をわたしたちに伝える。そこには他者への濃厚な違和があり、その存在はグロテスクに歪んだ形でとらえられている。

≪貝≫のなかの女たちはねばねばした存在の液を分泌してそのからだをつつんでおり、粘膜によって癒着する以外の交わりかたは不可能だ。

彼女たちは二枚の皮膚を一枚に粘りあわせて共有の膜をつくり、これをへだててどろどろした≪存在≫をたぎらせている。わたしはむしろ彼女たちがたがいに距離をとり、自分の皮膚を他人のそれからひきはがして、自分だけの孤独をつつみ、こぢんまりした球形の存在になるべきだとおもう。（傍点　小鹿）

「ねばねばした」という形容はサルトルの『存在と無』――「存在を顕示するものとしての性質について」のなかで繰り返し用いられる表現である。これは『パルタイ』の「粘液質の抽象的な壁」即ち過去に対応すると考えられるが、他者は自我（わたし）にまとわりつき、ねばりつく存在としてとらえられる。「わたし」はそれをひきはがさな

ければならない。「もしわたしが憎悪の砦をとりはらったとしたら、他人はそのまなざしやことば、ときには粘膜までつかって、どっとわたしのなかになだれこんでくるだろう」。その皮膚感覚は殺意に似ている。

わたしたちはいわば「他者地獄のなかに生きている。ねばりつきが意識されたときからそれとの葛藤がはじまるのだ。倉橋は他者の存在に神経質な反応を示し、それを異質のものとして激しい嫌悪をみせる。「わたし」の意識にとってそれは醜悪で愚鈍な脂肪の塊であり――無論モーパッサン的それではない――それは去勢された一個のよけいな肉にすぎないのである。

III

われわれは個別的存在の恐怖を、いやでものぞきこまされる――しかし、立ちすくんではいけないのだ。ある形而上学的な慰めがわれわれを一瞬ひきさらって、移ろいゆくもののひしめく雑踏から救い出してくれる。

――ニーチェ『悲劇の誕生』――

概して『パルタイ』は知的な作品だとされている。しかし論理的というより、それはむしろ感性的であり感覚的である。『パルタイ』のなかでは「あなた」が直観主義の名をもって「わたし」を批判する。この斜視の青年はあきらかにサルトルの諷刺である。倉橋はここでサルトル批判を垣間見させるが、批判は無論彼のアンガージュマンの思想に対してのそれである。あの大いなる状況の文学――語ることにおいて状況を変えようという私の企図そのものを通じて状況を暴露する(10)、という思想である。だが倉橋自身について言うなら、端的に言って学生運動あるいは政治・社会運動等に参加する体質の人間とは、彼女は要するに感性的に合わないのであり、違和感をもたないではいられないのであろう。それはあくまでも感覚的なものであり、だから『パルタイ』でのサルトル批判も論理としてのあるいは思弁としての展開をみないし、したがってそれは批判の形をなしてはいない。その段階では感性的に合わないという苛立ちを理屈づけるにとどまる。そしてこの限りでその姿勢は女性的であるといわなければならない。

それにしてもこうした感性とはどういう性質のものか。違和感覚はもうすこし語られなければならない。違和、それは世界と和解できないもののみが感覚する、世界に対してのあの違和である。それはひんやりとしていて、あるいはうしろめたさに似ているかもしれない。そうした違和感は『パルタイ』に頻出する〈オント〉ということばに圧縮されている。Honte とは「恥」であるが、それは異質なもの、愚鈍なものに対する違和を意味する。他者、存在、世界。自我(わたし)にとってそれら非我はいずれも異質であり愚鈍であり、醜悪ですらある。排他的という意味でそれは自我主義と呼べるかもしれない。『パルタイ』において違和のベクトルは、党やそこに属する人間の盲目的な革命の観念性に向けられる。しかしそれはひとつのかたちにすぎない。「存在世界の社会的構造がAであるかA′であるかということはどうでもいいこと(11)」なのである。革命家(かれら)がめざす「人間的な世界」の類はほとんど意味をもたない。ベクトルは存在

世界に固執すること自体に向けられているのである。存在論の核を包みこんでいる形而上学をイマージュの造形物に転位させる意図があった(12)、と倉橋がいうとき、彼女が現実に対していだく違和の感覚がはたして形而上学となり得るかどうかはわからないが、少なくともたしかにそれはメタフィジカルなものであり、形而上的と呼ぶことはできよう。存在の原理に於ける思惟や心象や観念、それらは言語をあたえられ、ひとつの形象となる。そのときことばという輪郭を備えた、わたしたちの眼前にある感性のエクリチュールは、極めてセンスティブなものを喚起させる。

『パルタイ』を単に実存主義に触発されたところの作品として読むことは容易である。現代仏文学に魅せられた、その文学空間は昭和三五年の文壇には新種であり、まず批評家がこれに飛びつき、しかもそれを書いたのが女性だというのでそこにはジャーナリズムの一種の甘やかしもあった、とみることはできよう。また一九六〇年代が学生運動全盛の時代であっただけに論議を醸した、とするのも容易である。だが、それらはおそらく容易すぎるだろう。この自意識の強い韜晦趣味の作家が模倣したかっただけというとき、わたしたちはそれに大まじめにつき合う必要はない。無論そこには倉橋の文学への審美的な動機が認められよう。しかし倉橋を文学へと駆りたてたのが、そうした「模作の衝動(13)」であったとして、その対象がなぜカフカでありカミュでありまたサルトルでなければならなかったのか。後年倉橋はモラヴィアの分析的な文体に刺激的なものをみるが、彼女がかれらの文学のなかで享受したものがそれだけであったとは思われない。要するにそれはそういった文体をもって語られているところの、あるいはその文体をもってしか語ることのできない内実なのである。これは性急すぎるだろうか。しかしことばの深い意味で言うのだが、その作家にとって、それを書くための二つの可能な書き方は存在しない。倉橋がそれに触発されたのは、そういった文体に対する「模作の衝動」を契機として彼女の生への意識が孕んでいる何かが動きだしたからにほかならない。おそらくそれは倉橋のなかですでに予感されたものであった。その「何か」を「実存」と断じてしまっても、それは「何か」であることをやめはしない。だから「わたしはカフカではないので、いかに忠実な≪模作≫をこころみてもおのずからそれはわたしの作品にな(14)」るのである。倉橋の裡にひそむ個としての生への意識、それを実存の名で呼んでも、しかし他の名で呼んだとしてもおなじことだろう。それは作品のなかに厳として存在していて、作品のさぐり難い根底でとらえられようとしている。できるならそれは野性のままであることが望ましい。広く実存哲学と呼ばれているもののなかから抽象されてくるようなにかではない。むしろ「実存」と名づけられたときから、それは野性であることをやめるだろう。たとえば「人間は一つの無益な受難である(15)」といったサルトルも現在ではもう流行らない。けれども実存そのものはそのこととともサルトルともかかわりがない。実存とかかわるのは実存すること自体だけだから。わたしたちはいつもわたしたちの途上において、一回的な実存とかかわるのだ。

世界は自己との相関物である。それはわたしたちをとりまいてい

る意味をもった全体である。逆説的にいうなら、世界はわたしの感覚である。世界に対しての否。それは世界に違和を体験した人間の、形而上の反抗である。そのとき、意志もまたひとつの孤独だ。『パルタイ』は己れの実存の意識と醒めた感性を核とする、二四才の倉橋の自我実現の試みだったといえる。

第二章　どこにもない場所

I

これまで述べてきた違和感覚は倉橋のどのような情況と意識のもとで胚胎されることになったのだろうか。それを考察するに直截な次の二点が、倉橋の深層でどのように生棲しているかを識る必要があるだろう。わたしたちは作家のなかに曖昧な無意識として内在するであろうものを感知しなければならない。即ち、戦後という状況がいかなる意味をもつものであったか、女であるという情況をどのように認識しているかの二点に留意すべきだろう。

まず、倉橋は「戦後」をどのように受けとめたのか。

気がつくと、わたしのまわりの現実世界は堅固にできあがり、わたしは世界の穴に巣食う虫の立場におかれていたわけです。この立場ははなはだ奇妙なもので、わたしは現実に対抗するよりどころとしての「傷」ももたず、現実の一定の地点に所属しているのでもなく、ただ異様に大きくなった「眼」で現実を「みる」という立場を選ぶほかなかったのかもしれません。(『袋に封入された青春』)

それはいつのまにか何の実感もなくすべりこんだ否応なしの現実であった。肯定と否定の間に引き裂かれることもなく、しかし「傷をもたない」という意識はそれ自体がある意味でひとつの傷みかもしれない。「世界の穴に巣食う虫」の自覚はアウトサイダーのそれにも似て、世界から遮断されたものの現実感覚にほかならない。しかもそのなかでの生を選ぶしかないとき、世界の蠢きをひたすら「みる」ことが唯一のありかただったといえよう。「みる」立場に自身を位置づけることは、同時に世界の「なか」と「そと」に見者として存在することである。状況を認識するためには俯瞰すべく視力に立脚しなければならない。「この世界を灼熱の≪無≫のなかに投げこみ、わたしたちの望む世界のイメージを無のなかに構成してみること(16)」――倉橋はこの位置を出発点とする。倉橋には、大江健三郎が固執する「遅れてきた青年」の世代意識ないし倫理感が稀薄だ。彼女はこれを「健康な感覚(17)」であっさりとかわしてしまう。その世代のなかで彼女は無縁であろうとする。アウトロウに内在するであろうひとつの傷みをも彼女はしりぞけるだろう、それがわたしたちの知っている倉橋だ。大江が閉塞状況から現実へのかかわりを強めていくとき、倉橋は「どこにもない場所」あるいは不在へと向かう。

II

たとえ修道女であろうとなんであろうと女はつねに女である。

「違和感覚」考察のいまひとつの手がかりは、女であるという（この致命的な）情況における倉橋の認識のありようをたしかめることである。この二点を結びつけるもの、それは「女は負の世界にとじこめられている(18)」という意識である。「つまり世界は男のもの(19)」なのであり、この認識には負の存在としての意識が明示されている。いまや絶望する理由は充分ある。なぜなら女は男ではないからだ。女というものは男を使って定義する以外にないといった捉えかたは、あのショーペンハウエルにも似て(20)否定的である。しかしショーペンハウエルは男である。彼は女に軽蔑のまなざしを向けるだけでいい。倉橋のこの認識は同時に恥（ナント）であり屈辱である。それが自身の存在の属性に向けられるとき、（男の）世界に対しての違和が蘇生してくる。「女」とは世界との関係である。なぜなら、そうあるように女に望んだのは世界であるから。しかも、負の存在としての女性空間と世界とはひとつの深淵によって隔てられている。

かつてボーヴォワールが名づけた「第二の性」としての、あるいは「他者」としての女の現実を認識し、それを全的にひきうけることから倉橋の〈第三の性〉としての投企がはじまる。それは「第二の性」の立場を利用しながら選びとり移行していく立場である。この目論みはひとつの止揚となる。即ち、「世界からはみだしている」位置を拠点とし、見者（ボヴィヤン）として世界を対象化することによって、それとの関係をうちたてること。このとき、「世界の裏側にはみだしている女(21)」の位置は「世界の穴に巣食う虫」のそれと重なる。この目論みと彼女のなかのイマジネールなものとが結託するとき、違和で構築された世界が紡ぎだされる。倉橋はそれに〈反世界〉の名を与えた。

しかしこの〈第三の性〉としての投企はどこまで可能だったのだろう。昏（くら）い希求にすぎなかったかのように、やがてそれは下降をたどる。倉橋は「女にとって書くことは《行動》ではなく分泌作用(22)」だとするが、これは倉橋の自虐であると同時に一種の自己防禦ではないかと思われる。『悪い夏』の女流作家と作者とを重ねて読むとき、その内部の逡巡や相剋が浮かびあがる。

自分が創っていたものは現実に対する「真の贋物」ではなく、結局のところ「贋物の贋物」にすぎなかったのではないか？

自己防禦と言ったのは、こうした作家内部の葛藤を通りながら「女であり小説を書くこと」が次第に小説を書く〈技術〉として正当化されていくからである。『反小説論』に至ってそれは竟に「女の手仕事」として称揚されることになる。しかし、それは倉橋の自身の文学に対する相反感情（アンビヴァレンス）にすぎない。だがそれは超克されるべきものだった。決して正当化されるものではなしに。わたしたちがここにみるのはひとつの蹉跌である。

――女性がかつて太陽であったというのは神話的なことである。女であること、それはひとつの桎梏だ。およそ男性を嫉妬することなく生きられる女性がいるだろうか。

第三章　反世界

そして僕の精神は、つねに眩暈におびやかされて、虚無の持つ無感覚を嫉むばかり。――ああ、「数」と「存在」との世界から遂に抜け出し得ないとは！

――ボードレール『深淵』(23)――

＜反世界＞の心象（イマージュ）はすでに『貝のなか』に見られる。しかしこの＜反世界＞の観念をわたしたちはどう捉えたらいいのだろうか。倉橋の「人と文学」を論じる際、このことばは括弧つきではあるが好んで用いられる。それは＜前衛＞とされる倉橋文学やおよそ殆どのことに対して ANTI（アンチ）を唱えるこの作家を論じる際、適当なことばだからであろうし、また＜反世界＞ということば自体のもつひとつの神秘のせいであるかもしれない。それにも拘らず、誰も＜反世界＞に立ちどまることをしない。しかし立ちどまることはできないか。わたしたちは＜反世界＞の意識をもった作家を＜反世界＞に閉じこめたままで論じるわけにはいかない。それは「女であることを子宮のなかにおしこめるわけにはいかない(24)」のと同様に。

＜反世界＞を定義づけようというのではない。倉橋がたてこもる＜反世界＞に一歩足を踏み入れるだけである。――＜反世界＞とはなにか。世界に対して否（ノン）といったところでそれはひとつの抽象にすぎまい。それはナルシズムであることを免れないだろう。＜反世界＞とは、倉橋の現実嫌悪と「世界内存在」としての違和とにイマジネールなものとがはたらいて創りだしたロマネスクな観念である。それは「無の、想像的な王国(25)」あるいは「凹型（おうがた）の世界(26)」と呼ぶこともできる。世界即ち現実此岸に所属する存在を正の存在とすれば、＜反世界＞に所属する存在は負の存在である。負の存在とは世界に自分を関係させるのではなく、自分自身に関係させる存在であり、その意味でこれは「純粋実存」の世界である。世界に所属できないものは、所属できないという限りで世界に対してうしろめたさに似た違和を体験する。その存在の惧れが＜反世界＞の構築へ誘うのだ。

こうしてぼくは世界の裏へとおしだされる。しかしどこに裏側の世界は存在するのか？　ぼくはあなたがたの世界をプラスの符号をもった存在の王国だときめよう。するとマイナスの存在符号をもった裏側の世界があるはずだ。あなたがたの世界で通用している掟がすべて裏返しにされた凹型の世界、それを存在させるのはぼくなのではないか。（『密告』）

＜反世界＞とは虚構されたマイナスの世界である。このプラスとマイナスを価値の正負の符号でなくするために、倉橋は＜反世界＞から世界へ向かって自らを投企しようとする。それは世界を無のなかに吸いとることであり、「無世界化」即ち世界性を奪いとる企てである。

＜反世界＞は非リアリズムの抽象観念で構築されている。そこにあるのは世界と自分だけで社会はない。独我論的なモノローグが回

転するばかりである。ある人はそれを空虚な空間とみるかもしれない。倉橋が「想像力の迷宮」と呼ぶものを「観念の遊戯」として批判することは容易である。それはおよそ「感動」というパトスから距離を置いている。作品は無機質の玻璃(ガラス)の城であり、それは血腥い真実を語らず、訴えることをせず、感動の波紋をよびおこすべく重さを備えてはいない。そしてそうしたことはまた倉橋自身めざしてはいない。城は現実世界のメタモルフォーゼであって、倉橋はむしろアモラルな空間を投影しようとしているのである。彼女はそれを悪夢と呼ぶ。ことばから煩瑣な日常性をぬきさり、一切の現実の束縛をはなれた抽象の空間に、ことばそれ自体の運動によって造形される仮像の世界。その観念の軌跡を倉橋はめざしたのだ。その創痕から〈反世界〉が浮上してくる。

しかし何故だろう。〈反世界〉の構築という孤独な、あるいはそれ以上に虚しいともいえる行為へとひとを駆りたてるものは何であろう。それを存在の恐怖だとするなら、この世界に違和をいだきつづける人間は、では一体この世界ではない世界になにをみたいのか。そしてわたしたちは表現者たるその人間のなかになにをみるか。この世界に居場所をもたないという意識が己れの生そのもの、存在そのものと対峙するとき、その内部に生じるであろうディレンマを想定することはむずかしいことではない。その軋轢がやがて生そのものを観念の幻想の世界に架けるであろうことも充分想定できる。そうしたなかにあって倉橋は、作家であることの意味や小説とはなにかをつねに自問してきたように思われる。この世界に所属できないという意識がある以上それは苦い問いである。その苦さの残滓のなかで心はおそらくことばの織りなす世界に開かれるだろう、即ち〈反世界〉だけに。そこ「存在の重力を欠いた場所(27)」では疎ましい肉をぬぎすて、軽々とした精神のみの存在になることも可能である。ごく現実的な見地からすれば、こうしたことはおそらく無用のものにすぎない。けれどもいったん世界に不在を嗅ぎつけたものはその違和からのがれることはできない。非在を充塡すべく何ものもない。あるのは習慣やおしゃべりなどの曖昧なものであり、わたしたちに与えられているのはいつもそうした気やすめでしかない。そして倉橋が告発しつづけてきたのはそうした現実であり、世界と水いらずになっている人間の日常ではなかったろうか。〈反世界〉への飛翔は現実への限りない憎悪の裏返しなのである。

この世界ではない世界――だが、世界とはおよそこの世界でしかない。あの世界もこの世界ではない世界もありはしない。わたしたちがいかに現実を忌避したところで、今ここにこの様にあることを否めはしないだろう。世界はあらゆる措定に先立って、わたしたちにいつもすでに与えられている。それはわたしたちに先行している。〈反世界〉を志向すればするほどひとは絶望を深めることになる。「誰も現実を喰いつくすことができない(28)」と。求めているのは竟に「どこにもない場所」なのである。そして絶望が反芻される。ここで想起されるのはM・ブランショのことば(29)だ。

世界にあってわれわれは否定に結びつけられていながらも、否定をひとつの可能性に、虚無をひとつの営為とすることに成功す

るのだし（これが世界にあるということだ）

世界はつねにわたしたちに和解を要求する。そうしてわたしたちは和解してしまうのだ、いとも簡単に――あるいは躓いて。それに抗いながら、それを越えた内なる世界を収斂していくこと。この、世界という徒爾は存続する。そして内世界とその運動もまた、究極のない叛逆であるよう強いられる。名づけられ得ない、それは生成の野心である。

（一九八三年卒）

註

1、「受賞のことば」　2、「小説の迷路と否定性」　3、『貝のなか』　4、「学生よ、驕るなかれ」　5、全集1作品ノート　6、「奇妙な観念」　7、同前　8、『カフカ』新潮世界文学『カフカ全集3』新潮社　9、ハイデッガー『存在と時間』岩波書店　10、サルトル『シチュアシオンⅡ』人文書院　11、『どこにもない場所』　12、『パルタイ』文春文庫あとがき　13、「小説の迷路と否定性」　14、同前　15、サルトル『存在と無』人文書院　16、「学生よ、驕るなかれ」　17、「袋に封入された青春」　18、「わたしの『第三の性』」　19、同前　20、ショウペンハウエル『愛と生の苦悩』人文書院　21、「わたしの『第三の性』」　22、「毒薬としての文学」　23、ボードレール全集Ⅰ『悪の華』福永武彦訳　人文書院　24、「わたしの『第三の性』」　25、『どこにもない場所』　26、27、同前　28、『聖少女』　29、モーリス・ブランショ『カミュ論』筑摩書房

国文学会ニュース（1）

一九八三年度総会は、七月三〇日（土）午後一時から家の光ビル第三会議室で開催されました。出席者数約五十名で、研究発表、会務・会計報告、役員改選等滞りなく終了し、六時からは同ビル第八会議室において懇親会が行なわれました。

研究発表者と本年度委員は次の通りです。

研究発表

江戸末期の能と謡　―鴻山文庫蔵　嘉永元年能名寄番付について―　中久木真治（修士課程二年）

メキシコにおける佐野碩　藤田富士男（博士課程三年）

一九八三年度国文学会委員（○印常任委員）

○安島　史雄　天野紀代子　○安藤　信広　伊藤　敬一
岩崎　武夫　大越　嘉七　大滝十二郎　○大谷　裕昭
大和田　茂　小野田伊市　片桐　登　○金川　正治
川崎三四子　○川村幸次郎　菊田　均　島本　昌一
○下沢　勝井　神　彰　○杉本圭三郎　鈴木　斌
○鈴木　和雄　○鈴木　敬司　高梨多恵子　○滝瀬　爵克
田中　優子　○谷口　卓久　中久木真治　○西野　春雄
○堀江　拓充　堀切　利高　○前田　角蔵　○正木　信一
○益田　勝実　○山田　稔　○横手　一彦　○横道　闌
○米山　賢司